『世界の日本語教育』4，1994年6月

〈翻訳論文〉

ブラジル日系人の敬語行動と文化変容

鈴　木　　妙*

はじめに

ブラジルにおける日本移民は，1908年，第1回移民団がサンパウロ州のコーヒー園の労働力として，サントス港に上陸したことから始まり，85周年を迎えたばかりである．初期の移住者は配耕された農村地に定着し，日本人同士のコミュニケーションでは日本語が使われた．それはさまざまな方言から成る一種の共通語となっていくとともに，ブラジルの工業化や移住者の生活水準向上等による都市移動が盛んになるにしたがって，周りのブラジル一般社会との交渉も頻繁となり，そこで使われるポルトガル語の影響も受けることになる．

一方，敬語は1つの言語現象であるが，発話で実現されると同時に，話し手の聞き手，または第三者に対する敬意，なんらかの考慮の表現でもあり，J.R. Searle のいう言語行動，J.L. Austin のいう発話内行動にあたる．そのように捉えた敬語行動が，日本とブラジルの日系社会の日本語においてどのように行われているかを比較し，それらにみられる社会的・文化的要因のはたらきを，社会言語学的観点から検討してみた．移住者の一世よりブラジル生まれの日系世代の方がブラジル社会から受ける影響は大きいものとみて，ブラジルの資料は後者から集めて分析し（ブラジル調査），それを国立国語研究所の調査（国研調査）結果と比較対照したものを，紙幅の関係もあって，簡略にまとめたのが本稿である．［なお，本稿はサンパウロ大学日本文化研究所紀要 *Estudos Japoneses 6* (S. Paulo, Centro de Estudos Japoneses-USP, 1986) に "As expressões de Tratamento da lingua Japonesa: Uso e Processo de Aculturação" という題で発表されたものを，筆者が抄訳したものであることをことわっておく．］

国立国語研究所は，1952年から1972年にかけていくつかの敬語行動調査を実施し，データ収集・分析法，敬語の段階づけ等を定義しながら進めたものを，次の2冊にまとめた．

1. 『敬語と敬語意識』(1957)——三重県上野市で最初に実施された調査によって敬語行動・敬語意識に関する調査法の主な点をあげ，1952年，1953年の2回にわたる全国調査でそれ

* SUZUKI Tae：サンパウロ大学日本文学講座教授．

を補ったり，改善したうえで，愛知県岡崎市で行った敬語行動研究の結果を収録したもの．

2. 『敬語と敬語意識——岡崎における20年前との比較』(1983)— —1972年，同じ岡崎市で実施された調査の結果を20年前のそれと比較し，敬語意識・敬語行動の変化を調べたもの．

前者は必要に応じ参照し，後者を軸に進めたこの対照研究の目的は，敬語行動における社会的要素の関与をみることにあるので，敬語に関する意識・意見・内省等には触れず，もっぱら社会的要素に留意したことを前もってことわっておく．

なお，国研調査の詳細は上記文献にゆずるが，その実施法と結果を簡単にまとめてみると，次のようなものである．

（1） 岡崎市住民登録から年齢，性，居住地別にランダム式に選出した被調査者の社会生活調査

（2） 面接調査による言語データ収集

（3） 録音されカードに写された使用敬語形式の段階づけとその分析

（4） 社会的要因と敬語行動との関連分析

以上の段階を経て，1952-1972年の20年の間にどんな変化が敬語意識に起こったかを調べた国研調査は，敬語使用は減少した，言葉遣いが乱暴になった，若者は敬語が使えなくなった，という一般見識を覆すこととなった．依然として，敬語行動に強く作用する要因は性と学歴であって，予想に反して年齢はさほど関与しないのである．というのは，男性は場面による敬語の使い分けを女性よりするにも関わらず，女性の方が常に丁寧な言い方をし，学歴の高いものほどより丁寧な表現を使うということである．

ブラジル生まれの日系人を対象とするブラジル調査も同じく，被調査者の社会的文化的属性，その使用する日本語における敬語行動の調査をもとに，社会的要因と言語的要因との関連を分析したうえで，その結果を国研調査のそれと比較したものである．しかし，一方では単一言語の日本，もう一方ではポルトガル語と日本語を場面によって使い分ける2言語併用の日系社会という，根本的に異質な地域社会を対象とするので，ブラジルでは調査法やデータ収集において日系社会の実状にある程度適応せざるを得なかった．

まずは被調査者を選ぶにあたって，ブラジルには住民登録のようなものはないため，日系住民の全体を把握し，ランダム調査を行うことは困難なので，理想的ではないにしても，日系社会の中で，この研究目的のための最低条件を備える集団から選び出すこととした．その目的とは，2つの異なった環境において敬語使用にどのような社会的・文化的要素が関与するかをみることにあるので，ブラジルの日系社会と深い関係があり，それを代表する日系人口のまとまった集団を選んだ．その意味で，多くの日系職員を雇用してはいるが，敬語行動にも関わってくる企業組織や経営法をそのまま取り入れることの多い日本の進出企業を避け，日系社会で生まれたコチア産業組合を選んだ．その選択理由として次のようなものが挙げられる．

（1） サンパウロ州の日系農産物生産者を援助するために現地資産によって作られた組合であり，日本企業をモデルとした社内の職階や行動パターンは採用されがたいと思われること．

（2） 農業関係の企業である以上，20世紀初頭のコーヒー園の労働力として移住し，40年代までは主に農業に従事した日系社会 (Suzuki 1969: 55) の出自と強く結ばれている従業員が多くいると予想されること．

（3） 本部がサンパウロ市にあるので，同市の工業化のため，日系を含む職員が全国各地から集まってくる可能性が多いこと．

（4） コチア郡の養鶏部を含む大サンパウロ圏までその範囲を広げ，職種も農業者から技術者までと幅広いものが期待されること．

そのコチア産業組合の日本語が話せる日系職員を被調査者としたブラジル調査の概要を，各段階に分けて次に述べる．

1. 社会生活調査

いうまでもなく，ブラジル日系人の敬語行動と関連する社会的文化的要因を考慮するにあたって，その生活環境は日本のそれとは条件がまったく異なる．日本語が日常語ではないブラジル社会で生活する以上，日本語との接触率あるいは日本文化との関係をみる必要が生じてくる．前者は日本語学習歴，日本語の使用率等をいうが，後者は親や移住者から直接受け継いだ日本の価値観，生活様式，またはラジオ・テレビ等から間接的に受けた影響のことをいう．

被調査者の社会的属性を分析するにあたって，それらをより日本的なものとよりブラジル的なものとに区別し，1958年に実施されたブラジル日系人の実態調査によって既に日系の社会的属性とされたものを加えて，調査表を作成した．その項目を概略的にここに列記しておく．

1. 性

   a） 男性　b） 女性

2. 年齢

   a） 19歳まで　b） 20-29歳　c） 30-39歳　d） 40-49歳　e） 50歳以上

3. 世代

   a） 二世　b） 三世　c） 四世　d） 混血

   二世の場合，親が就学前に移住しブラジルで教育を受けたいわゆる準二世であることもあるので，その親の移住したのが就学前か後かによって，次のように再分類した．

   ① 二世　I——両親とも就学後に移住した者

   ② 二世　II——両親のうち，1人が就学前，1人が就学後に移住した者

③ 二世 III——両親とも就学前に移住した者

4. (元)配偶者の世代

a) 一世　b) 二世　c) 三世　d) 非日系人

5. 祖父母との同居

a) 祖父母(一方が欠けてもかまわない)と同居したことがある.

b) 祖父母と同居したことがない.

6. 同居者

a) 一人暮らし

b) 非日系人を含む友人・兄弟と同居

c) 日系人の友人・兄弟と同居

d) 非日系人の親戚(配偶者，甥姪，義兄弟等)のいる家族と同居

e) 一世のいる日系家族と同居

f) ブラジル生まれの日系だけからなる家族と同居

7. 居住地

a) 10年以上農村に住んだことがある

b) 5-10年間農村に住んだことがある

c) 5年以下農村に住んだことがある

d) 都会在住のみ

8. 職種(ブラジル職種表による)

a) 専門家(技術者)およびそれに準ずる者(会計士・農業技師等)

b) 管理職者

c) 事務員およびそれに準ずる者

d) 商業関係の仕事に携わる者

e) 機械操作者・運転手およびそれに準ずる者

f) サービス業・衛生に関する仕事に携わる者(掃除婦・料理人等)

g) 農業労働者(農機具係等)

9. 最終学歴

a) 学歴なし　b) 小学歴(小学校)　c) 中学歴(中学校・高校・技術専門学校)

d) 高学歴(大学)

10. 親の最終学歴

a) 学歴なし　b) ブラジルの小学校　c) ブラジルの中学校　d) ブラジルの大学

e) 日本の小学校　f) 日本の中学校　g) 日本の大学

11. 宗教

a) ブラジル宗教(カトリック教・アフリカ奴隷のもたらした霊媒宗教等)

b) 日系宗教(仏教・神道・新興宗教等)

c) 諸教混交

d) その他(無宗教・新教等)

12. 団体加入(日系団体と非日系団体とに二大別し,前者は県人会・生け花協会・青年会等,主に日系人の集まる団体のことをいい,後者は同業組合やスポーツクラブのことをいう)

a) どんな団体にも参加していない

b) 日系団体に参加している

c) 非日系団体に参加している

d) 両者に参加している

13. 日本語教育

a) 日本語を勉強したことがない

b) 日本語を10歳まで勉強した

c) 日本語を10歳以上まで勉強した

d) 日本語を10歳以上で勉強し始めた

14. 家庭内での日本語使用

a) 使ったことがない

b) 現在使わないが以前使っていた

c) 現在日本語だけを使う

d) 現在,日ポ両語を使う

15. 職場での日本語使用

a) 使わない　b) 使う

16. 団体組織で使う言語

a) ポルトガル語だけを使う

b) 日本語だけを使う

c) 両語を使う

17. 邦字新聞の閲読

a) 全然読まない　b) ポルトガル語欄だけ読む　c) 日本語欄も読む

18. 日本語の雑誌・新聞の閲読

a) 読む　b) 読まない

19. 日本語のラジオ番組

a) 聞く　b) 聞かない

20. 日本語のテレビ番組

a) みる　　b) みない

21. 日本の歌謡曲

a) 聞く　　b) 聞かない

当調査の目的は読み書き能力とは無関係に敬語行動を調べることにあったので，コチア産業組合に「日本語を理解する日系」と登録されていた職員500名に調査表を配布し，収集された386部から「ブラジル生まれの日系人」という条件にあてはまらない者を差し引いた303名にその後，面接による言語調査を行ったが，この段階でさらに調査表配布後の解任，転任，出張等による不在や，録音ミス，心理的抑制による面接拒否等で最終的に集められたデータは266名からであり，以後この被調査者を対象に述べていく．

データをもとにした，コチア産業組合の日系職員の 31.6% にあたるこの被調査者のプロフィールは次のようなものである．

1. 日本語の話せる日系の大半は二世(74.4%)で，そのうち 81.3% は両親とも就学後に移住した二世Iである．なお，この調査では日本語の話せる混血は1人もおらず，四世は1名に過ぎなかったことを記しておく必要があろう．
2. 被調査者の多く(63.5%)は，日本移民が農業移民であったことと関連して，5年以上も農村地に住んだことがある，あるいは現在住んでいる．
3. 非日系との結婚は少ない(14.4%)が，一世との結婚(8.3%)よりは多い．
4. 大多数(71.4%)はカトリック教信者であり，無宗教者(11.6%)に近い数値(13.5%)が日本宗教信者である．
5. 日本語との接触に関しては被調査者の多くは書き言葉(本・雑誌 45.0%，新聞 13.1%)よりもっとも手近な話し言葉(テレビ 85.0%，歌謡曲 89.8%)によるもので，その数値はラジオの場合(44.7%)の約2倍である．

なお，被調査者の社会的属性のクロス・タブレーションからみると，もうすでに指摘されてきた日系人口の都市移動および文化変容を裏づける現象が今もなお起こっていることが明らかとなる．

農村に住んだ経験のある者は多く(70.3%)，その過半数(71.1%)は10年以上も住んだことがある，あるいは現在住んでいるのである．一方，都市生まれの人は若年層に多く(42.1%)，10年以上農村に住んだのは50歳以上の人が 71.4% を占める．これは日系人の都市移動が，60年代に顕著に起こったブラジル総人口のそれよりやや遅れて始まり，その歴史がまだ浅いことを物語ることとなろう．それと関連し，若年層における高学歴率が高く(29歳までが 53.9%，30-39歳が 64.9%)[1]，年齢があがるにつれてその率は低くなっていく．なお，高学歴者だけでみると，年齢

[1] 29歳までの数値が30-39歳よりも低いのは，前者に高校在学中，または大学へまだ進学していない者がいるからと考えられる．

層が低くなるにしたがって大学卒業者や中退者の数が増え，これも都市集中と学歴向上の相関を物語っている．

文化変容もその線上にあるもので，これは宗教や日本語使用において顕著に現われる．どの年齢層および世代でも，いわゆるブラジル宗教が優勢であり，若い者ほどその率は増える傾向にある．

一方，日本語使用に関しては日常，家庭で話す人(57.5%)より職場で話す人(64.3%)の方が多い．年齢層別でみると，年齢が高くなるほど日本語を話す人の率は増えるが，家庭で話す人の中で20代まで(56.3%)と30代(44.7%)が逆になる．職場では一応，日本語を話す人，または話さねばならない人の属性は同じだが，家庭では同居者によってその使用状態は変わってくる．実際，家庭で話す20代までの人の 47.6% は独身で，一世の親と同居していて，同条件の30代の人は 19.0% と半減する．この数値は，若くて独身の人は両親と住むことが多く，家庭で日本語を使うことも多いが，結婚すれば，配偶者が日系人であっても，家庭では使いなれたポルトガル語を使うようになることを示し，言語における文化変容が起こっていることの証ともなる．

被調査者の社会的属性からも指摘できる言語における文化変容が，敬語行動にどのように反映するかを次にみていく．

2. 言語調査

国研調査と同じく，面接調査による言語データ収集，敬語の段階づけ，社会的要因と言語的要因の関連分析の順で進められたこの調査も，状況や条件によっていくつかの点を修正，あるいは変更せざるをえなかった．その主なものを挙げておく．

敬語行動分析のもう一本の柱となる言語資料は面接によって集めた．面接というだけで緊張やはにかみのため話し方が不自然になるのは避けられないが，それをなるべく少なくするためにも，被調査者の実生活により近いものをと考慮し，国研調査とは違った場面を設定した．話し手と聞き手，または登場人物との関係を，日本語の敬語に関与する場面的要因(性，年齢，階層，内外関係，親疎関係)を軸に考えたうえで，次のような場面を設定した．

[場面 I]

(a) 父親，(b) 姉，(c) 女の同僚，(d) 男の同僚が不在のとき，それぞれの友人から電話がかかってきたと仮定し，その伝言を伝える場面．伝言はいつも同じだが，電話をかけた人と伝言を受ける人が変わる．

1.1. 「某(話している相手の友人)は行くと言っていた．」

1.2. 「あなたも行くか．」

[場面 II]

直属の上司(例：課長)と，同等の役職についている人(例：別の課の課長)について話している場面.

2.1. 「あなたはもう某(上司と同役の人)にこのことを伝えたか.」

2.2. 「私は彼に電話しておいた.」

2.3. 「彼はすぐ来ると言っていた.」

[場面 III]

(a) 同年輩，(b) 被調査者より若い，(c) 被調査者より年上の会社の顧客と話す場面.

3.1. 「おそくなってすまない.」

3.2. 「これがあなたの注文した書類である.」

3.3. 「もっと詳しく説明するのに上司を呼んでくる.」

[場面 IV]

一番親しい友人と電話で話している場面.

4.1. 「家に食事に来ないか.」

4.2. 「先日，某(2人の友人)と会ったら，彼/彼女の家へ遊びにくるようにと言っていた.」

4.3. 「父がよろしくと言っている.」

被調査者を話し手とするこれらの場面における聞き手は，場面 I と場面 III でそれぞれ4人と3人に区別され，全部で9人，すなわち9場面となる．その根底には次のような場面要素が仮定されている.

(1) 性——場面 I の男の同僚と女の同僚

(2) 年齢——場面 III の聞き手となる顧客の年齢層

(3) 内外関係——場面 II における話し手と聞き手(上司)および登場人物(上司と同役の者)との関係

(4) 親疎関係——場面 I の同僚に対する場面 IV の友人

なお，同一人物に対して，その登場する場面で果たす役割によって，話し手である被調査者が扱い方を変えるかどうかをもみることにした．たとえば，話し手の上司は場面 II では聞き手であると同時に動作主体でもある(「あなたは伝えたか」)が，場面 III では顧客を聞き手とする談話に第三者として登場するようになっている．この場合，内外関係のはたらきをみると同時に，同じ上司が聞き手である場合と第三者である場合とでは話し手の扱い方が変わるかどうかをみることとなる.

以上の場面をポルトガル語で書いて説明したものを被調査者に一応読んでもらい，少しでも日本語で話しやすくするためにそれをさらに日本語で口頭で説明してから，日本語で言い換えてもらうことにした.

録音し，カードに書き写した資料をもとに敬語行動を調べるには，言語形式の数量化が必要となり，国立国語研究所が考案したのが敬語の段階づけである．使用された言語形式の組合せから計った敬度を基準に，もっとも丁寧な段階 I からもっとも乱暴な段階 V に分けたものをいい，くわしくは前記『敬語と敬語意識——岡崎における20年前との比較』を参照されたい．

その基準をもとに，ブラジル調査でも敬語形式の段階づけを行ったが，場面が違えば敬語形式も変わるので，ブラジルで各段階に新しく加えられたものをあげておく．

段階 I——「～デゴザイマス」に「デス・マス」などの丁寧な言い方が続くもの(ほかに丁寧な言い方が続かない場合，段階 II 以下とする)，「マス」と「デス」が重なってあるもの，「オ～ニナル」に「デス・マス」などが続くもの，といった国研調査と共通の形式のほかに，

1. 「オ～テイタダク」に「デス・マス」の続くもの
2. 「～サセテイタダク」を使ったもの
3. 「スミマセン+デス」に続いて「オ～イタシマス」などがあるもの
4. 「ドウモ申シ訳アリマセン」にほかの丁寧な言い方が続くもの

段階 II——「イラッシャル」に「マス」のつくもの，「申シ上ゲル」に「デス・マス」のつくもの(ほかに丁寧な言い方が続かない場合段階 III とする)，「オ～テ下サイ」にほかの丁寧な言い方が続くもの，「～レル・～ラレル」に「デス・マス」のつくもの，「ワタクシ・オタク」を使ったもの，「マイリマス」を使ったもののほかに，

1. 「オ～イタス」にほかの丁寧な言い方がつくもの
2. 「申シ訳アリマセン」にほかの丁寧な言い方がつくもの

段階 III——「スミマセン」の次に「クダサイ」がつくもの，「イタシマス・～テイタダキマス・オ～マス・オ～デス・オ～クダサイ」を使ったもの，デス・マスが1回でも「～ガ・～ケド・～カラ」があるもののほかに，

1. 「イラッシャイ」を使ったもの
2. 「～レル・～ラレル」+「デス・マス」があるが，文末が乱暴な言い方で終わるもの

段階 IV——「デス・マス」1つだけで段階 III 以上に入らないもの，「クダサイ・チョウダイ」に「デス・マス」のないもの，「スミマセン」だけでほかのプラスの材料がないもの，「レル・ラレル」があり「デス・マス」のないもののほかに，

1. 「デス・マス」は使うが，文末が「タイ・タクナイ」で終わるもの

段階 V——国研調査と同じく，「デス・マス」のないもの，「スミマセン」で始まっていてもほかに丁寧な言い方のないもの．

文法的な間違いや，ポルトガル語で出された単語をそのまま使ったもの，または適当に置き換

えたものは考慮に入れないで，以上の言語形式を基準に収集された文を5段階に分類した．ここにその例を1つずつあげておく．

段階 I 「オ待たせイタシマシタ．これはオタクの手帳でゴザイマス．Chefe (上司) をオタクに説明するように呼びマス．」 (被調査者60番・場面 III (a))

段階 I の基準となる「～デゴザイマス」を使ったほかに，段階 II の基準となる「オ～イタシマス，オタク」を使い，「マス」で文を終わらせているので段階 I とした．

段階 II 「カイチョウサンに報告サレマシタか．僕はもう電話を入れマシタケド，会長はすぐ来ラレルそうデス」 (被調査者313番・場面 II)

「レ＋マス」，「レ＋デス」，「～ケド」を使ったので，段階 II とした．

段階 III 「さちこさんが明日，Expo Brasil-Japao に行くようになっていマスが，お姉さんも行きマスか」 (被調査者93番・場面 I)

「マス＋ガ」と一緒に「マス」が使われているので段階 III とした．

段階 IV 「加藤さんが行くって言った．お父さん，行きマスか」 (被調査者79番・場面 I)

「マス」を1回だけ使ったことから段階 IV とした．

段階 V 「あなたはうちに食べに来る？ あのう，高野に encontra (会う) した．わたしたちに高野の家に行くように言った．Papai (父) がよろしく言った」 (被調査者90番・場面 IV)

敬語形式を1回も使わないので，段階 V とした．

この段階づけはブラジル日系人の敬語行動を調べるために行ったのだが，資料を分析するにあたって筆者の注目を引いた現象が二，三あったので，それらに簡単に触れておく．

まずあげられるのが日本文に出てくるポルトガル語の単語の頻度である．場面は被調査者の日常生活になるべく近い状況，したがって語彙も日本語で知っているものをと考えて設定したにも関わらず，ポルトガル語の干渉はかなり多く，次のような形で表われた．

(1) もっとも多いケースで，日本語の構文の中にポルトガル語の単語(名詞，ポルトガル語動詞＋スルの混合動詞，副詞の順)を使う．

例：「これがあなたの注文した documento (書類) です」

「パウロに encontra (会う) した」

(2) 文構造は一応日本語だが，使用される単語はほとんどポルトガル語．

例：「Chefe (上司) が senhor (あなた) に explica (説明) する」

(3) 日本語の単語を使うが，構文はポルトガル語．

例：「Voce (あなた) tambem (も) 行く？」

このポルトガル語をなんらかの形で使用する者の率はかなり高く，段階 I で 76.7%，段階 II で 85.4%，段階 III で 94.4% と増え，段階 IV と V では全員が使っている．もっとも多く使

われた papai (お父さん) は，父親に直接話しかける時 (場面 I) や親しい友人に向かって親のことを言うとき (場面 IV) の，子供のころから父親を呼ぶ1つの定着した呼称とみることができ，それを差し引けば段階 I が 67.0%，段階 II が 81.8% とその使用率はやや低くなる．なお，ポルトガル語の単語を使用する人が増えるとともにその単語数も増え，段階 I では前述の papai と同性質の voce (あなた) のほかに chefe (上司)，documento (書類) といった名詞といくつかの日ポ混合動詞に限られているが，段階 V ではその数は3倍となる．

なお，もうひとつ指摘されるのが謙譲表現の使い方を知らないということである．敬意を表する人物の人・動作などに直接尊敬語を与えるのとは違って，謙譲語は話し手自身や話し手側の人，または敬意対象人物より下位の者をいったん下げて敬意の対象へ間接的にその意を表わす敬語で，使い方はひとひねりのある複雑なものであるせいか，よく間違って使われる．たとえば，119番の被調査者の「Paulo さん，Walter さんに話してくれた?」(場面 II) の文だが，ここでは Paulo とは話し手の上司，Walter は Paulo と同職階の者であって，両者とも話し手より上位者である．その上司の Paulo が「話す」の動作主体であるので，ここで「くれる」を使うことは下位のものが上司に何かを依頼し，それを実現してくれたかを確認する表現となる．一応，上司を「さん」づけで呼んではいるが，ここでは Walter という別の課の上司が登場し，なんらかの形でその距離を示そうとして「くれる」を使ったとも考えられるが，敬語行動としては誤用となろう．このような間違いは段階 I の数少ない謙譲語使用の中でも多く認められた．

3. 社会的属性と敬語行動との関連

国研調査にならい，各文の敬度の段階によって，敬度の高いものに1点，無敬語に5点というふうに，敬度が下がるにしたがって高い数値を与え，その総合点から被調査者を敬語使用能力による5つのグループに分けた．理論的にはその数値は，最低9点(全場面にもっとも高い段階 I の敬語を使った場合)から最高45点(全場面で敬語を使わない場合)となるのだが，場面によってはその性質からも敬語を使わなくてもいいもの(場面 IV)，軽い敬語ですむもの(場面 I) などがあって，ここで得られたのは18～45点である．その頻度の分布に基づき，大体において次のように特徴づけられる5グループに再区分した．

グループ I (30人・18～22点)

尊敬語，謙譲語，丁寧語を使い，尊敬語の使い分けは上手にできても，謙譲語は必ずしもそうではない．

グループ II (55人・23～29点)

全場面で丁寧語を使い，尊敬語を使うこともある．

グループ III (90人・30～36点)

聞き手に対する丁寧語は一応使うが，使わないこともある．

グループ IV (56人・37～42点)

丁寧語は知っているが，ほとんど使わない．

グループ V (35人・43～45点)

敬語をほとんど知らず，ポルトガル語の単語や構文を多く使う．

以上の5グループに分類し，被調査者の社会的属性と敬語要素との関連を次の2つの観点から分析してみた．

(1) 敬語行動とその主体である被調査者の社会的属性との関連，すなわち各グループにおける被調査者の敬語行動に関与する社会的要素のはたらきをいい，これを「話し手の社会的文化的要素」と称する．

(2) 敬語と各場面における社会的要素との関連，すなわち各グループにおける被調査者が場面による敬語の使い分けに考慮する社会的要因の分析をいい，これを「敬語の場面要素」と称する．

3-1. 話し手の社会的文化的要素

国研調査によると，敬語行動に関与する属性は順番に性別，学歴，年齢である．男性より女性のほうがよく敬語を使い，もっと丁寧であること，男女とも学歴が高いほど話し方がより丁寧になること，年齢が高くなるにつれて丁寧度も高くなることを意味する．

一方，ブラジル調査では年齢，日本語文献の閲読，日常生活における日本語使用，世代，学歴という順で関与する属性があげられる．日本でもっとも強い要因となる性別はここで出なかったが，これは企業で行った調査であるため，職員の男女分布にはまだかなりのアンバランス(男84.6%，女 15.4%)がみられるからだと思われる．

性別を除くほかの属性の中から，日本とは比較対照できない日系社会特有の日本語文献の閲読，日本語使用と世代を除けば，年齢と学歴がそれぞれ，もっとも強い・もっとも弱い関連の要因として表われ，それは日本とは逆の順になる．日本と条件の異なった日系社会で得た結果である以上，これらのデータをほかの要因と照らし合わせて考える必要があろう．

まず，年齢と世代との関連をみると，新しい世代ほど年齢は低くなる傾向にあり，50歳以上のほとんど(95.2%)が両親とも就学後に渡伯した二世 I で，三・四世の過半数(53.9%)が最若年層の者である．なお，日本語との接触もこれらと関連し，年齢が高いほど日本語で書かれた文献を読むことや日本語で話す機会が多く，若い世代はその日常生活で日本語と接することは少ない．

したがって，ここであげられた日本語を話すこと・読むこと，世代という要因は年齢に付随するもので，就学前に渡伯した移住者は就学後に移住した者よりブラジルへの同化が強く，その子弟の言語行動も三世のそれに近いものとなる．世代が新しくなるにつれて日本語から遠ざかり，

ここでも日常生活での日本語使用でみられたように，言語における文化変容が起こっていることとなる．

もっとも弱い要因の学歴をみても，その関連が明らかとなる．中学歴の人より高学歴の人のほうが敬語をよく使い，これは日本と同じ傾向であるが，ブラジルでは低学歴者がもっとも丁寧な言い方をし，敬語の使い分けもよくするのである．年齢と学歴との関連をみてみると，低学歴しかない人は40歳以上の層に集中していて(84.3%)，これは日系の学歴が時代とともに向上してきたことを意味する．日本移民は1960年代に人口の都市集中が起こりはじめたころにほぼ中止となり，年にわずかな移住者を迎えることとなる．二世の数が多いのも最初の1960年代に移住者が多かったこと，1960年代後にはその数が急激に減少し，新しい世代に変わっていったからということになる．

以上のように，ブラジル日系人の社会的属性の軸は年齢や世代にあり，ほかの要素は多くこれらと関連してくる．生活条件が向上し，子弟の教育を考える余裕も生まれ，職業的社会的向上を求めての都市移動が盛んになったことが根底にあり，その結果，ブラジルへの同化あるいはいろいろな面での文化変容がより活発となるのだ．

3-2. 敬語の場面要素

場面要素に関して，国立国語研究所は，被調査者がどういう要素を考慮に入れて敬語を使い分けるべきと考えるかという，いわゆる意識調査の形を取り，敬語使い分けの指標として階層，年齢，性別がこの順であげられた．一方，ブラジルでは各場面にあらかじめ組み入れておいた要素を実際に考慮して使い分けるか否かを調べてみたことはすでに述べた通りである．

被調査者の社会的属性と敬語行動の関連をみるには，使用された敬語の丁寧さや使い分けの的確さを考慮に入れたが，ここでは敬語とは関係なく，場面の違いによって敬語の使い分けをするか否かだけを考慮した．たとえば，女の同僚に「マス」を使うが男の同僚には使わない場合，これを性による使い分けと判断したのである．

結果として，被調査者の 44.7% のみが場面による使い分けをした．年齢がもっとも多く考慮される(38.9%)要素であり，かなりかけ離れて親疎関係(17.4%)，性別(15.1%)，階層(14.5%)，内外関係(13.9%)があげられる．ただし，もっとも丁寧でしかも敬語をよく使うグループ I の中でみると，内外関係(28.6%)，階層(26.8%)，年齢(21.4%)，性別(12.5%)，親疎関係(1.1%)という順になる．日本では問題とされなかった両端の内外関係と親疎関係を除くと，他の要素の順位は日本と同じである．高年齢層で構成されるこのグループは，話し手の社会的属性で指摘されたように，日本と似た敬語行動を示すこととなる．

一方，敬語使用の能力が劣るにしたがって年齢も低くなるが，グループ IV・V では日本社会における人間関係独特の内外関係は1人も考慮しなかったうえに，場面による敬語の使い分けも

少ない．これらを除いたグループ II・III では年齢・性別，親疎関係が優勢であり，これらはポルトガル語の敬語行動の指標にもなるものである．一般的にブラジルでは年上の人や女性を丁寧に扱う習慣があり，日系人もある程度同化したら，それらを日本語の敬語行動に反映させるとみられる．なお，親疎関係については，日本とブラジルではその意味合いが多少違ってくると思われる．ブラジルでは，親しみをもって接することは，相手を自分に近づけて親しい者と考えるという肯定的側面しかないが，日本では，それと同時に相手を話し手側の者とし，外の世界・他人の領域の者に対して謙譲の気持ちで扱うものとなる．

以上のようにみていくと，古い世代であり，年長者であるもっとも「日本的」な日系人は日本でみられる敬語行動に似通ったパターンを示し，ブラジル同化のもっとも著しい若い世代では，それがブラジル一般社会のものに近寄り，日本語の敬語においても反映しているといえよう．

ま と め

今の若者は言葉遣いが下手になった，乱暴になったという一般見識を覆すように，国研調査では年齢が敬語行動にもっとも弱い影響しか与えない要素であって，若年層と高年層ではその使用に大した差が認められない．強く関与する要因は性別であって，女性は男性よりいつも丁寧であることとなり，古くから日本社会で育てられた男尊女卑の風習を連想させる．約1世紀前から顕著となった西洋化にも関わらず古い価値観は保たれ，男女平等と最近よく唱えられるが，そういったものは言語を通した人間行動に姿を表わすこととなる．

一方，80年前に日本の移住者がブラジルへ持ってきた日本語は，日系社会における家庭の中，または日系人同士のコミュニケーションで使用され続けた．日本の各地から移住してきた人たちが築きあげたこの日系社会は，いろいろな方言の総合影響およびブラジル社会から受けた影響からなる共通語を生み出すこととなる．ブラジル生まれの子弟は社会的同化の強化過程の中で，親からその言語遺産を受け継いできたのである．言語と社会の相互作用を考えるのを目的とするこの調査では，コチア産業組合の日系職員の約3割だけが現時点において日本語が話せる，という数値が出ている．

この数値に被調査者の敬語行動指標を加えて考えると，日系のブラジル社会への同化と同時に言語における文化変容が進行している程度が示唆される．日本語の敬語行動に関していえば，より同化していない者ほど敬語をよく使い分け，日本のパターンに似た場面要素を考慮して敬語を使用する．

敬語行動と関連する社会的属性の根底には年齢があり，年長者で，古い世代の者，したがって文化変容をさほど受けていない日系社会とより深く接している者のほうが，ブラジル社会にもっと溶け込んだ若い世代の者より敬語をよく使い分ける．なお，就学後に渡伯した移住者の子弟は

それ以前に移住した人の子弟より日本文化との接触は強く，日常生活においても日本語を使う率は大きい．

同じく，世代が新しくなればなるほど謙譲語の使い方は知らなくなり，対人関係を丁寧語だけで解決してしまう傾向がある一方，日本文化特有の場面的要素を離れて，ブラジル社会のものをパラメーターとした敬語を通して人と接するようである．

農村離れ，社会的地位向上によって日系人のブラジル社会への同化が進むにつれて，言語の文化変容も進み，母国語としての日本語は次第に姿を消すことになろう．ブラジルにおける日本語の敬語形式，非言語的要素の考慮，敬語意識を含む敬語行動もその線上にある．日系人がブラジルに同化するということは，一方において，家庭でかつて習得した日本の文化的パターンからの隔たりを，もう一方では生活する環境の社会的文化的要素の吸収を意味し，敬語行動にも現われる新しい世界観，新しい考え方をもたらすのである．

この研究はサンパウロ市，しかもその一集団を対象に行われたので，ブラジルにおける日系社会一般についていうには疑問の余地があろう．したがって，別の地域社会に調査を広げること，およびその動態を把握するための通時的研究を組織的にはかることが望ましいと思われる．

参 考 文 献

国立国語研究所 (1957) 『敬語と敬語意識』，国立国語研究所．
――― (1983) 『敬語と敬語意識――岡崎における20年前との比較』，三省堂．

Austin, J. L. 1970. *Quand dire c'est faire*. Paris: Seuil.
Handa, T. 1973. O destino da lingua japonesa no Brasil. In *Assimilação e Integração dos Japoneses no Brasil*, eds. H. Saito and T. Maeyama. Petropolis: Vozes.
Nogueira, A. R. 1964. *Imigração Japonesa na História Contemporânea do Brasil*. S. Paulo: Centro de Estudos Nipo-Brasileiros.
Searle, J. R. 1972. *Les actes de langage*. Paris: Herman.
Suzuki, Teiiti. 1969. *The Japanese Immigrant in Brazil: Narrative Part*. Tokyo: University of Tokyo Press.